

国文研ニュース

No.55 SUMMER 2019



『子易の本地』

目次

●メッセージ

牛はどこに連れていかれたか —『枕草子』から—..... 倉田 実 1

●エッセイ

足で稼ぐということ —伊藤栄治資料をめぐって—..... 川平 敏文 2

●トピックス

ぶらっとこくぶんけん 多摩学術文化プラットフォーム 入口 敦志 4

企画展示「本のかたち 本のこころ」..... 5

展示室特設コーナーの利用について..... 入口 敦志 5

ないじえるレポート—AIR・川上弘美さんとのWSから—..... 岡田 貴憲 6

パチカン図書館所蔵マレガ文書から広がる国際的協働と日本近世文書の国際的活用 高見 純 8

絵巻の旅—日本古典籍セミナー— 邱 春泉 9

2019 ホノルル国際共同研究会と日本古典籍セミナーの開催 木越 俊介 10

TEXT AND TEXTUALITY IN JAPANESE COURT POETRY

—AAS 2019 デンバー 研究発表— 神作 研一 11

国文学研究資料館基幹研究「アーカイブズと地域持続に関する研究」

シンポジウム「松代藩・真田家の歴史とアーカイブズⅢ」..... 西村慎太郎 12

第16回日本古典籍講習会(平成30年度) 岡田 貴憲 12

〈新収〉白田甚五郎旧蔵資料の紹介 神作 研一 13

閲覧室だより 神作 研一 13

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況 14

牛はどこに連れていかれたか — 『枕草子』 から —

倉田 実 (国文学研究資料館共同研究委員会委員、大妻女子大学教授)

『枕草子』「すさまじきもの」段に、その一例として次のような記事がある。

また、かならず来べき人のもとに、車をやりて待つに、来る音すれば、さななりと人々出でて見るに、車宿にさらに引き入りて、轆ほうとうち下すを、「いかにぞ」と問へば、「今日は外へおはしますとて、渡りたまはず」などうち言ひて、牛のかざり引き出でていぬる。(注・新全集のみ「牛のかざり」とする)

人を乗せずに戻ってきた牛飼童は、牛車を車宿にさっさと入れて、牛を連れて去ってしまったという。牛はどこに連れて行かれたのであろうか。ほとんどの注釈書類は、「立ち去る」「行ってしまふ」あるいは「帰ってしまった」とするだけで、どこへの説明がない。和泉古典叢書だけが、「牛舎につれていくのである」としているが、牛舎(当時は牛屋)のある場所まで触れることはない。

当時の牛屋はどこにあったのか。牛はどこに飼われていたのか。平安時代の文学作品では『うつほ物語』に吹上の牟婁の家で牛屋が示されており、敷地内にあったことになっている。古記録類では院政期にならないと牛屋の用例はないようで、後白河院の六条殿などではやはり敷地内に造作されている。しかし、『枕草子』の「牛のかざり引き出でていぬる」とされたのは、敷地外に去ったようにも読み取れるのである。

そこで邸宅の敷地外に牛屋がある事例を絵巻物で探してみると、『融通念仏縁起』に牛飼童の家の一画で牛が曲物桶に入った飼葉を食べている場面を見出すことができる。牛車は敷地内の車宿に格納されても、牛は町屋にある牛飼童の家で飼われていたことが判明する。

鎌倉時代成立の絵巻物だが、『枕草子』の時代でも同様であったとすれば、「すさまじきもの」とされた内実は、来るはずの人が来ないことと、牛飼童がさっさと牛を連れて門外に去ってしまったことにはあつたのではなからうか。牛が牛飼童の家で飼われていることが分かっているならば、この章段の意味もより实际的に把握できたことであらう。しかし、文学研究に絵巻物を援用することはほとんどなかったと思われる。

別の例を示そう。『更級日記』「上洛の記」に、孝標女一行が仮屋で夜を過ごした記述が二例ある。しかし、現行の注釈書類は、仮屋を、仮に作った家とするだけで実態的に

説明することはない。仮屋はいったいどのような施設だったのか。

そこで同じように絵巻物を見てみると、『石山寺縁起』巻一第五段に、三つの仮屋が描かれていることがわかる。一つは握舎だが、他は、かなり高級となる檜皮葺で床が張られて格子の代わりに御簾を廻らしたものと、松葉葺で床がなく同じく幔(幕)を廻らしたものになる。これで仮屋が視覚的、实际的に理解ができ、孝標女一行の泊まった仮屋も見当がつくのである。

そして、仮屋とはされていないが、門出先の「いまたち」という所の家が、「めぐりなどもなくて、かりそめの茅屋の、葎などもなし。簾かけ、幕など引きたり」とされたのも、それではなかったかとの類推が可能となってくる。太井川の畔では「かりそめの仮屋」とされ、門出先では「かりそめの茅屋」である。この茅屋も仮屋であったとの理解が可能なのである。

絵巻物で描かれた物などが検索できる、『新版絵巻物による日本常民生活絵引』が作られ、今日でも有用な索引となっている。しかし、貴族にかかわる事例は少なく、絵巻物も数や場面が限られているので、『石山寺縁起』の仮屋は、ここで検索できない。また、「牛飼い童の家」「牛屋」の項目はない。こうした事例が検索できる総合的な絵引があれば、どんなにか便利であらう。

現在、国文学研究資料館では紙媒体の様々な史料の画像化によるデータベース構築に取り組んでいるようである。画像といっても、史料を映像化する意になっており、絵像・図像の意はここにはない。しかし、絵や図に示された様々な事象が、絵引としてあつたならば、それはきわめて有用であり、文学研究に資すること絶大であると思われる。文学研究の立場でも絵引は必要である。その構築に多大な労力などが必要となれば、それができるのは国文学研究資料館しかないであらう。是非とも総合的な絵引構築実現の方向を探ってほしいと思うのである。

なお、筆者が三省堂HPで連載している「絵巻で見る平安時代の暮らし」の本年五月アップ分で先の牛飼童の家について触れ、仮屋のことは九月アップ分で扱う予定である。併せて参照願えれば幸いである。

足で稼ぐということ ―伊藤栄治資料をめぐる―

川平 敏文（国文学研究資料館資料分析専門部会委員・拠点連携委員会委員、九州大学大学院人文科学研究院准教授）

文献調査の経験談について、若手に向けて何か書いてほしいという依頼を受けました。訪問先に菓子折を必ず持参するとか、閲覧の前にあえて「御手洗いはどちらですか」と聞くとか、閉室時間ギリギリにならないように、余裕をもって切り上げるとか——そういうマナーについての具体的な話は、いやしくも研究者を志す人ならば、先生や先輩から何かしら伝授されているはず。私がこれから書こうとするのは、そういった一般論的なことではなくて、ある一つの資料と、その資料をめぐる様々な思い出です。むしろそういった具体的な体験談の方が、かえってリアルに、文献調査の楽しさやその意義を伝えることができると考えたからです。

話は、私が大学院に入ったばかり、修士課程一年生の頃に遡ります。私は近世における徒然草の注釈史・受容史を研究テーマに定めました。そこで、全国各地に散在する徒然草注釈書類を、手当たり次第に調査するという作業を始めたのでした。そのころ私の所属する九州大学出身の近世文学研究者は、当時福岡女子大学教授であった井上敏幸先生をチーム・リーダーとして、九州各地の文庫調査を継続的かつ精力的に行っていました。佐賀県鹿島市の祐徳稲荷神社中川文庫、大分県日田市の広瀬資料館、福岡県柳川市の柳川古文書館などです。私もその一員に加えてもらい、文献調査のイロハを伝授されたのですが、まだ見習いなので十分な戦力にはなりません。そこで「自分の見たい本があったら見ていいよ」という自由時間も与えられたのでした。

祐徳稲荷神社中川文庫に行ったときのこと。事前に目録によって、いくつかの徒然草注釈書が所蔵されていることを調べていたので、その自由時間のときに、さっそくそれらを取り出して書誌を採りました。いちばん期待していたのは、『国書総目録』（現・日本古典籍総合目録データベース）にも記載されていない写本の徒然草注釈書二点、すなわち『徒然草直談抄』と『徒然草大意』でした。しかし現物を見ても、いずれも一〇丁に満たない片々たる写本で、かつ内容もほぼ同じ。少しがっかりしながら、とりあえずカメラで撮影したのでした。

残念ながら、中川文庫の資料はそれほど期待に沿うものではなかった——ように思っていました。しかし、現像（今は死語になりつつあります）してプリントされた写真をじっくり読んでいて、なかなか面白い記事が書いてあることに気づきました。それは、これらの資料の筆者と思しき伊藤栄治なる人物が、どうやら『鉄槌』（慶安元年1648刊）という徒然草注釈書の編者でもあるらしいということです。しかし通説では、『鉄槌』の編者は青木宗胡なる人物とされています。そこで、伊藤栄治とはいかなる人物かに

ついて調べ始めました。

今までまったく知りませんでした。この伊藤栄治なる人物は肥前島原藩に仕えた歌学者・神道学者であったらしく、地元島原の郷土史家が、ある程度詳しい伝記を書いておられました（注1）。そこで引用されている資料のなかに『島原藩日記』があり、栄治の任用にかかわる記事があります。栄治は江戸の島原藩邸で、時の藩主・松平忠房に徒然草を講釈しており、それが殿様のお気に召して、このたび藩で召し抱えることになった、というのです。栄治と徒然草との関係が結びついてきました。

次に私が向かったのは、島原市の松平文庫でした。栄治が仕えた藩の文庫なので、当然、何らかの資料があるだろうと思ったのです。しかしながら、歌学書・神道書のなかに、栄治の奥書を有するような資料はありませんでした。当時松平文庫長をされていた本多茂先生にこのことを話すと、先行研究で紹介されていた栄治の墓碑に、車で案内してくださいました（図1）。



【図1】伊藤栄治・永運墓碑。撮影は冬季

夏の暑い盛りだったので、藪蚊の恰好の餌食となってしまう、文庫に戻ったあと「かゆい、かゆい」と言いながら、二人で競うように痒み止めを塗ったのを覚えています。また先生は、上述『島原藩日記』が所蔵されていた市内の神社に私を紹介くださったので、上の記事を自分の目で確認することもできました。

かくのごとく栄治ゆかりの島原では、先行研究の追認程度しかできませんでしたが、じつは『徒然草直談抄』『徒然草大意』を蔵していた中川文庫にこそ、栄治関連資料がたくさん伝存していることを、後ほど井上敏幸先生から伺いました。先生はとくに栄治のことをマークしておられたのです。栄治は、中川文庫の収蔵本の多くを集めた鹿島藩第四代藩主・鍋島直條へも、和歌・神道の伝授・講釈などを行っていました。直條の母は、島原の松平忠房の妹。つまり直條は忠房の甥にあたるわけで、そのような縁故を通

して、栄治は直條とも繋がっていたのです。『徒然草直談抄』『徒然草大意』がこの文庫にあるのも、そういう理由があったのでした。

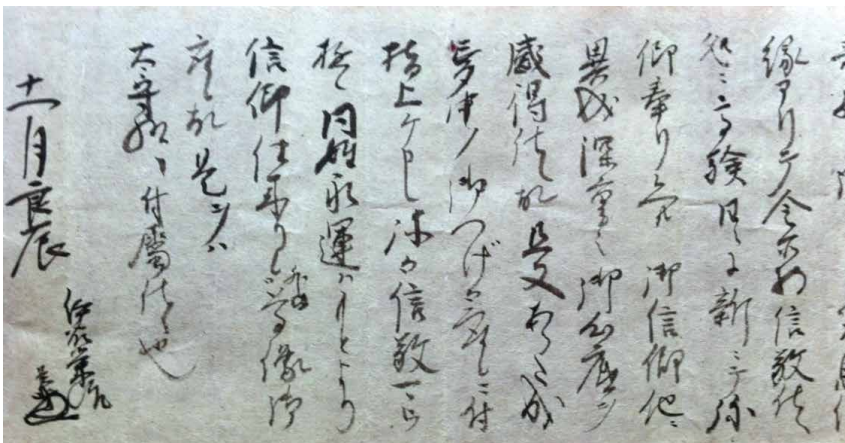
ところで、栄治は若き頃、伊勢・名古屋に滞留していました。特に伊勢神宮神官たちを中心に構成されていた伊勢歌壇との関係は、すでに先行研究でも指摘されています。となれば、次に目指すのは神宮文庫です。こちらもある程度は目録で目星をつけていましたが、あとはまったくの勘によって、栄治が関わりそうな人物の著述類を探ってみようと思いました。そのような一人が、外宮禰宜の中西信慶で、彼の詠草を集めた『愚詠草稿』なる写本を出納してもらい、片っ端からめくっていきました。すると案の定、栄治宅で歌会を行ったというような記事が散見されます。嬉しくてむさぼるようにその筆跡を追っておりますと、一人の若い男性から声をかけられました。金城学院大学に就職されて間もなかった頃の、神作研一氏でした。「ちょっとお茶でもどうですか」。それが氏との初対面でした。当時、伊勢歌壇のことを研究されていた氏は、当然『愚詠草稿』に載っている栄治のこともご存知で、さまざまな情報を教えてくださいました。以来、研究の関心・嗜好を等しくする者として、何かにつけて私を導いてくださっています。栄治が結んだご縁の一つです。

そうこうしながら、栄治についての情報が一とおりに集まってきたところで、私は博士論文の一篇として、『鉄槌』の編者—伊藤栄治説—という論文を書き下ろしました(注2)。従来言われている『鉄槌』青木宗胡説を批判し、伊藤栄治説の蓋然性を唱えたわけです。博士論文の審査委員のひとり、当時九州大学教授であった今西祐一郎・国文学研究資料館前館長でした。口頭試問のとき、上記の論文について先生は、「資料というのは、それを必要とする人の許に現われてくれるもんですなあ」と仰いました。私が先

生から頂戴したコメントのなかでは、これは最大級の褒め言葉ではないかと思います。たいへん有難いのですが、しかし厳密に言えば、これらの資料は偶然、向こうから現れたものではありません。当たり前のことですが、資料というのは多くの場合、必要とする者がみずから手繰り寄せるものです。「棚からボタ餅」という奇跡は、そうあるものではなく、『国書総目録』に記載されていないような本に出会うためには、みずから文庫に足を運ぶしかないわけです(地方の公共図書館の郷土史コーナーなどは特にお奨めで、掘り出しものが埋もれている可能性が高い)。足で稼ぐ——私はそう呼んでいます、私の研究の大半は、そうして足で稼いだものなのです。

ところでその後、私の栄治研究は停滞期に入りますが、しかし十数年後に再び、新たな資料群に出くわすことになります。また、あの中川文庫です。なんでも、神社の一部の建物を改修するさいに、長持一棹分の資料が出て来た、そのなかには、直條とその孫の第六代藩主・直郷が受けた神道関連の伝書が何百点か収められている、というのです。井上敏幸先生から驚きの一報を受けて、後日調査に参りますと、そこには栄治の書簡・伝書など、四八点も含まれておりました(注3)。当然ながらすべて自筆です(図2)。

このとき思いましたのは、井上先生のように、一つの文庫に長く関わることの重要さです。自分の見たい資料だけを見せていただくのではなく、自分の人生を懸けてその文庫とお付き合いする。井上先生の、中川文庫へのそのような誠意と愛情がなければ、このような発見に立ち会うことはなかったかもしれません。文庫との——つまりは所蔵者との信頼関係をいかに築くべきか。栄治資料からは、そのようなことも学ばせていただいたのです。



【図2：栄治書簡の一部】

注

- 1 入江 清『墨是可新話』(現代出版社、1969年)
- 2 拙著『徒然草の十七世紀—近世文芸思潮の形成—』第IV部第一章に再録している。また栄治の年譜は拙稿「伊藤栄治—ある歌学者の生涯」(『雅俗』第10号、2002年)参照。
- 3 拙稿「肥前鹿島藩主鍋島家の神道書とその周辺—新出『神道伝授秘函』を中心に—」(『調査研究報告』第33号、2012年)参照。

ぷらっとこくぶんけん 多摩学術文化プラットフォーム

国文学研究資料館（以下、国文研）は、2008年3月、現在の立川市緑町に移転してきました。以来、展示やイベントなどとおして、地域への貢献を目指してきました。そして10年を越える月日が経ったのですが、地元立川、更には多摩地区の方々に広く認知されているとは言えません。そこで、国文研では、多摩地域への貢献を深めるための基盤作りに取り組み始めました。

国文研の持っている豊富なコンテンツを、どのようにして多摩地区の学術・文化の発展につなげていくかを考え、既に多摩地区において文化事業を展開している多摩

信用金庫（以下、たましん）と連携することとなり、2018年7月に「学術・文化の発展に関する包括連携協定」を締結しました。これは単にたましんと国文研の二者の連携だけでなく、プラットフォームを形成することで、多摩地区の企業・地方公共団体・大学などが連携しながら、学術文化の発展を目指そうというものです。このプラットフォームを「ぷらっとこくぶんけん」と呼んでいます。

主な事業内容は以下のとおりです。

- ・多摩地域の学術・文化に関する講座、講演会の開催。
- ・所蔵資料、データベース等を活用した各団体との連携活動。
- ・産学連携の推進。

まずは地域の方々にそのことを知っていただくために、2019年1月21日に多摩地域で事業を営む方に向けた「連携協定締結記念セミナー」を開催しました。第1部では国文研のロバート キャンベル館長による「初めて出会う、ニッポンの力」と題した講演が行われ、第2部では立川の事業者である株式会社壽屋の清水浩代取締役副社長とキャンベル館長とで、活動の将来像についての対談を行いました。

多くの方に集まっていただき、大変盛況でした。また、プラットフォームへの入会の問い合わせなども多くいただき、関心の高さもうかがわれました。

2月20日には、第2弾として周辺自治体を対象としたセミナーを開催しました。キャンベル館長講演「多摩の魅力とニッポンの多様性—ぷらっとこくぶんけんのできる多摩への貢献—」に続き、西多摩郡瑞穂町の宮坂勝利企画課長と館長との対談が行われました。



宮坂勝利氏の豊富な活動実践のお話しは大変興味深く、今後の協力のあり方に大きな示唆を与えていただいたと思います。こちらのセミナーにも多くの自治体関係の方々にお越しいただきました。セミナー後には国文研の資料や施設の案内もしましたが、興味を持っていただけたようです。

年度も改まり、2019年度から本格的な活動を開始いたします。具体的には以下のようなイベントを予定しています。

- ・くずし字講習
- ・100人ぐりっ首 英語でとる百人一首
- ・「ぷらっとこくぶんけん」カフェ（研究成果の紹介）



「ぷらっとこくぶんけん」のイメージ図

- 古典籍データベースを使用した企画 ※年賀状・カレンダー等を作成するワークショップ
- 和本に親しむ企画 ※和本を作成するワークショップ

国文研のホームページに「ぷらっとこくぶんけん」のページを開設しております。イベントの開催が決まりましたら、そちらでお知らせいたします。ご注目ください。

ただいま、参加団体を募集しております。先に述べましたように、既に興味を持って下さっている事業者の方にはご入会いただいています。入会申込書等をホームページに置いておりますので、そちらをご覧ください、ご入会いただければ幸いです。(https://www.nijl.ac.jp/activity/plat/)

産・官・学が相互に連携しながら、多摩地域の学術文化発展のために貢献できるプラットフォームになることを希望しています。趣旨にご賛同いただき、ご支援をお願いいたします。(入口 敦志)



企画展示「本のかたち 本のこころ」 会期：令和元年10月15日(火)～12月14日(土)

世界にも稀な伝存量と種類の多様さを誇る日本の本について、その豊かな広がりや原本の展示によって紹介します。川瀬一馬旧蔵書をはじめとする近年当館収蔵または寄託の貴重資料、その他学術的価値がありながらこれまで広く紹介されていない資料に重点を置いて、展示を行います。

展示室特設コーナーの利用について

当館では、大学や公的研究機関を対象に、研究成果等を展示・発表するために、展示室特設コーナーを開放しております。展示室に入ってすぐのところの置かれた4台の展示ケースを活用し、通常は当館の教員によって企画された、研究成果や紹介を兼ねた展示を行っています。小規模ではありますが、展示室では最も目立つ箇所です。ここを使っ

てごらんになりませんか。お申し込みをお待ちしております。
なお、申請の方法や運用要領については、ホームページでご案内しております。そちらをご参照下さい。
<https://www.nijl.ac.jp/event/tokusetsu/2019/03/post-10.html> (入口 敦志)



ないじえるレポート —AIR・川上弘美さんとのWSから—

現代を生きる女性・原田梨子が、生涯のパートナーに選んだ生矢への愛と苦悩の狭間で、夢の世界に逃避し時空の往還を繰り返す物語、『三度目の恋』。作家・川上弘美さんの手によって紡がれてきたこの連載小説は、2019年3月26日の雑誌『婦人公論』（中央公論新社）において、すでに第28回を迎えています。

川上さんは、国文学研究資料館が文化庁の委託を受けて行っている事業「ないじえる芸術共創ラボ」に、AIR（アーティスト・イン・レジデンス）として2017年より参加されています。『三度目の恋』は、同事業の目指す古典籍活用の一環として創られている作品であり、在原業平らしき男の恋愛遍歴を綴った、平安時代を代表する物語の一つ『伊勢物語』に、大きな源泉を求めています。

2018年度より国文学研究資料館へ着任した私は、平安文学を専門とする関係から、AIRの川上さんを招いて行われたワークショップへこれまでに2回参加し、平安時代の恋愛や生活事情について若干の知見を提供してきました。

ワークショップへの参加にあたっては、事前に川上さんからのご質問をいただいております。その内容に沿った参考資料を用意して臨むようにしています。川上さんのご関心は、物語や日記などには描かれない生活の細部へ及んでいることが多く、それらに「書かれていること」を日頃追究している私にとって、盲点でありしかも重要なことを示唆されることの連続です。ご質問を受けて古典を読み直すたび、平安貴族の生活の分かっていること・分からないことが腑分けされ、その都度に蒙を啓かれる、川上さんとのワークショップはそうした貴重な機会となっています。

*

これまで寄せられたご質問の中で、頭を悩ませたものの一つに、「平安時代の既婚の女性貴族の一日はどのようなものだったか」というものがありました。特に川上さんは「何もしていない時の生活」にご関心を向けられていましたが、物語、あるいはそれ以上に貴族の生活に密着した女流日記を繕いみても、小説執筆に際して求められる「当たり前」の生活についての情報はことごとく省かれており、「たとえ些細であってもイベントがなければストーリーは生まれない」ことを思い知らされます。

一方、当時の男性貴族に関しては、官人としての生活をめぐる記録が残っていることから、従来の研究文献はそこから女性の生活を類推しています。日向一雅「女性貴族の一日」（注1）によれば、既婚女性の生活は日の出前に始まり、「起床とそれに続く夫や息子の出仕や外出の世話が、一日の最初の節目」でした。早朝は粥程度の軽食で済まし、夫が午前の出仕を終えて帰宅する午前10時～正午頃に、おそらくは夫婦揃って一度目の食事、そののち午後4時頃に二度目の食事を摂り、通常は日暮れからほどなく床に就いたと考えられています。藤原道綱母が、夫・兼家の同母妹である藤原登子との歌の贈答を夜通し続け、『蜻蛉日記』に「……となむ、夜一夜いひける」（注2）と記したのは、それが非日常だったゆえと言えましょう。

こうした一日の中で、既婚女性の重要な日課として行われたと考えられるのが、夫の衣服の裁縫・染色です。上記『蜻蛉日記』にも、道綱母が兼家から裁縫の依頼を受ける場面が散見するように、衣服周りは妻の仕事として特徴的に描かれている節があります。その理由について、岩坪健「女房の身分と役割」（注3）は「男性の装いは、結婚後は花嫁の実家がすべて用意するのが習慣であった。……裁縫・染色の未熟さは、離縁の一因になる」と指摘しています。そのような事情を踏まえると、たとえば『落窪物語』において落窪の姫君が継母から裁縫の仕事押しつけられているのは、単に雑用を任されているのではなく、継母自身の役目を特に強いられていることになり、継母の陰険さがいっそう際立つことにもなりそうです。

既婚女性のその他の日課として、さきの「女性貴族の一日」は「庭の草花の手入れ、物詣で、物見、弹琴、絵を描くこと、物語をみること、手習い、詠歌、勤行、物思い、日記すること」などを列挙していますが、多くは趣味・遊興の類です。今日でいう「家事」の実態が見えづらいのは、それが当時は女房（侍女）の役割だったためでしょう。川上さんの『三度目の恋』はそうした実態を汲み取り、第22回から女房視点の物語へと没入しています。男性社会に身を委ね、消閑にいそしむしかなかった女性貴族の日常が、平安文学と同じ女房の目線からどう切り取られるのか、一読者としても次の展開に興味をかき立てられます。

*

『三度目の恋』には、主人公の夫・生矢が在原業平を思い起こさせる造形で描かれるなど、『伊勢物語』のモチーフ

が随所に散りばめられていますが、それと同時に、作中には小道具として実際の『伊勢物語』も登場し、古典に触れたことのある読者を不思議な二重構造の中へいざないます。

行灯の光のもとでは、濃紫のおねえさんが読んでいた伊勢物語本の文章が、わたしが高校時代に教科書で読んだ伊勢物語の文章とは、まったく違うものであるように感じられました。授業で伊勢物語をいやいや読んでいた時には、その文字や文章は、いかにも平らで荒唐無稽で欠け多く思えたのです。

ところが、あのおぐらい郭で(中略)眺めた伊勢物語は、たいそうしんねりと色よいさまに思われるのでした。
(『三度目の恋』第12回)

夢の中で、江戸時代の遊郭に暮らす禿(遊女見習いの少女)となった主人公・梨子は、古典に素養のある「濃紫のおねえさん」が読んでいた『伊勢物語』の「白玉の段」、すなわち第六段に心を引かれ、業平の盗み出した女(のちの二条の後)が雷雨のなか鬼に喰われ消えてしまう、という結末に涙します。対して、小学校で用務員を務めていた縁から梨子と交友関係にある「高丘さん」は、女は実際は兄たちに連れ戻されたのだ、と物語の背後にある真実を告げます。そのことは、『伊勢物語』第六段の末尾、「後人注」と呼ばれる部分に次のように書かれています。

御兄——堀河の大臣、太郎国経の大納言——まだ下臈にて内裏へ参りたまふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへしたまうてけり。それを、かく「鬼」とはいふなりけり。(注4)

ところで、ここまで『三度目の恋』を読み進めてきた読者は、梨子の涙したこの第六段が、すでに小説中にモチーフとして使われていたことを知っているはずです。それは、生矢が勤め先の副社長の許嫁に恋をし、人知れず逢瀬を重ねるも、ある日唐突に破局を迎えるエピソードでした。

そのひとには長兄と次兄がおり、あるときナーちゃんとそのひとが逢っているところに突然やって来て、そのひとを家にひき戻したそうです。それはちょうど、二人で逢っているお店の個室の席を、手洗いに行くためにナーちゃんが一瞬はずした時だったとか。
(『三度目の恋』第7回)

二人の兄に連れ戻された女が、やんごとない家柄の娘であり、男の気づかぬうちに消えてしまう、という点まで、この挿話は『伊勢物語』を忠実になぞっています。

この出来事があった当時は、「授業でいやいや読んでいた」程度の経験しかなかった梨子ですが、遊郭の禿として『伊勢物語』に接した彼女は、ことの顛末が「白玉の段」とそのまま重なり合うことに気づけるはず。そうすると、小説中に散りばめられた『伊勢物語』のモチーフが次々と梨子に知覚され、果ては生矢その人が業平であり、自らが『伊勢物語』の世界を生きていることさえも、彼女の知るところとなるのでしょうか。

平安時代物語の語り手は時に、

御心の中なりけむこと、いかで漏りにけん。(注5)

のような感想を挟み、自身の語る物語がフィクションであることを露呈します。梨子もまた物語の枠組みを飛び越えようとする時が訪れるのか否かが、私の関心事の一つです。

*

あるいはこのような理解は、川上さんの狙いを読み違えたものであるのかもしれませんが、そこで気になるのが、私の研究テーマの一つである「誤読」の問題です。

平安時代の物語や日記を読んでいると、助詞や助動詞の単純な錯誤や、ことばの用例にそぐわない解釈、文脈の誤認、難解な文を通ぜしめるための意図的な曲解といった、さまざまな「誤読」があることに気づかされます。私は主に『源氏物語』について、それらを正していく作業に取り組んでいますが、明確な過ちはともかく、複数の解釈が成り立ちうる場合も少なくなく、難渋することがあります。

作者などとうに亡く、そもそも誰が書いたのかすらも分からない古典の場合、その正解は神のみぞ知るですが、はっきりと作者の決まった現代小説の場合は話が違います。複数の解釈が成り立ちうる場合でも、作者自身の狙いがただ一つのことであれば、狙いを定めず、読者に解釈の幅を与えていることもあるでしょう。

川上さんは作家として「誤読」をどうお受け止めになるのか、『三度目の恋』を反芻しながら思いを馳せています。

(記・2019年3月末日 岡田 貴憲)

(注1) 有精堂編集部編『平安貴族の生活』有精堂出版、1985年

(注2) 小学館新編日本古典文学全集『蜻蛉日記』158頁

(注3) 鈴木一雄監修・伊井春樹編『源氏物語の鑑賞と基礎知識 夕霧』至文堂、2002年

(注4) 新編日本古典文学全集『伊勢物語』118～119頁

(注5) 同『源氏物語』花宴・①355頁

バチカン図書館所蔵マレガ文書から広がる国際的協働と日本近世文書の国際的活用

2018年12月14・15日、永遠の都ローマで、日本の近世文書の解読を熱心に学ぶ人々の姿がありました。旧郵便局の建物を活用した校舎にあるローマ大学サピエンツァの教室で、マレガ・プロジェクトと、ローマ大学東洋研究学科（東芝国際財団「調査研究：イタリア他、欧州の図書館所蔵の日本の古文書研究におけるネットワーク」）の共催事業として、ワークショップ「日本歴史資料（古文書）のくずし字解読と資料調査法—マレガ文書を通じた日伊教材開発・教授法研究のために—」が開催されました。

周知の通り、国文学研究資料館、東京大学史料編纂所、白杵市教育委員会、大分県立先哲史料館などの国内諸機関や、バチカン図書館等の現地諸機関に所属の研究者が連携して推進する通称マレガ・プロジェクトは、2011年にバチカンで発見された、キリシタン禁制に関する史料群の調査と研究のために発足したプロジェクトです。これまで、サレジオ会宣教師であったマリオ・マレガ神父が収集した膨大な史料群（マレガ文書）の概要調査、資料修復、デジタル画像・資料目録の作成、そして画像データベースの作成を進めてきました。

データベースの一部公開という局面を迎えるにあたり、その活用と研究の重要性も強く意識されています。本ワークショップは、将来的にマレガ文書（及びデータベース）を活用しうる研究者の国際的レベルでの開発と育成を射程に、そのための教授法・教材開発を目的とします。実際のくずし字解読の教材としてマレガ文書が活用され、史料所在地であるヨーロッパで史料群の存在をアピールする意義も含まれます。

ローマでのこうした試みは、3回目となりました（過去の開催の詳細は、三野行徳「バチカン図書館所蔵マリオ・マレガ収集文書群の調査と活用—ローマでのくずし字講座と講演会の開催について」『国文研ニュース』No.50, WINTER, 2017, 11頁を参照）。1日目には、太田尚宏（国文学研究資料館）「日本歴史史料（古文書）の解読と内容理解」のくずし字解読のための基本的な知識獲得を目的とした講義、大津祐司（大分県先哲資料館）「儀式となった絵踏」及び佐藤孝之（東京大学史料編纂所）のくずし字解読の実践的講義の後、参加者によって実際の文書解読が試みられました。2日目は、古文書の概要調査を主題として、太田尚宏「概要調査の方法と技術」、史料撮影や番号付のデモンストレーションの後、参加者は調査用紙への記入を実習しました。

また、ローマに引き続き、同月18、19日には、日本研究を含むアジア・オリエント研究の重厚な伝統を誇るナポリ東洋大学にて、ワークショップ「日本歴史資料（古文書）のくずし字解読」が開催されました。ナポリ湾の青々と輝く海を一望できるベランダ付の海岸沿いの一室で、くずし字解読の講義と実践が行われました。

両都市でも、日本の専門研究者から具体的な指導を受ける機会への関心は非常に高かったようです。現地ローマやナポリの教員・大学院生のみならず、イタリア各地、更には国外からの参加も見られ、歴史、文化、言語等の様々な専攻分野を有する数十人の受講者が集まりました。

開催地の研究者の熱意と行動も、印象的でした。ローマのワークショップの目的である現地イタリアで有効な教材・教授法の開発、及び日本の古文書解読についての将来的な拠点作りといった展望も、こうした現地研究者の熱意ある実践の蓄積が不可欠です。

今年度も、プロジェクトは国際的枠組みでの協働を推進する予定です。10月26日には、バチカン図書館チエーザレ・パシーニ館長、及びアンヘラ・ヌーニェス・ガイタン史料保存部門長を招聘し、大分県大分市にてプロジェクト主催の国際シンポジウムが開催される予定です（地域と共催）。ローマ法王来日の記念事業の一環として行われる本シンポジウムでは、パシーニ氏、ロバート・キャンベル氏（国文学研究資料館）らによって、マレガ神父の収集した日本関係資料のコレクションが有する意義と、コレクションを媒介に広がりうる様々な可能性が議論される予定です。合わせて、マレガ文書群の有する豊富な内容の一部が紹介・活用され、大分の豊後切支丹史の一端が豊かに再構成されることも期待されています。

（高見 純）



ワークショップ会場（ローマ大学サピエンツァ）

絵巻の旅 ―日本古典籍セミナー―

正直に申し上げますと、私は日本文学を研究しておりますが、絵巻については貧弱な知識しかありません。そのような私ですが、国文学研究資料館と北京日文学研究センター共催の日本古典籍セミナー「描かれた物語―絵巻研究へのアプローチ」のポスターを目にした時、「描かれた物語」というテーマに心惹かれました。物語がどのように描かれているのかを知りたいという興味が急に湧いてきたのです。そうなるも居ても立ってもいられず、長雨の続いていた長沙から麗らかな春の光に満ちた北京に駆けつけました。

セミナーが行われる会場に入るやいなや、そこに展示されている絵巻と絵の具に目を奪われました。それまでに本物の絵巻を見たことがなかったので、早速近づいて目を凝らしました。展示されていたのは『信貴山縁起絵巻』『伴大納言絵巻』、そして『源氏物語絵巻』それぞれの複製でした。ただし複製でありながらも、薄茶色の紙と所々剥落している色彩が作品の歴史を伝えていました。またそれとは対照的に、展示されている絵の具は天然鉱物ならではのキラキラと華やかな色を誇っていました。絵の具の鮮やかな色は絵巻のかつての絢爛さを偲ばせるものでした。

絵巻の表現技法についての知識は、吹抜屋台と右から左への時間の流れぐらいい私は持ち合わせていませんでした。そのため目の前の絵巻を見ても、その繊細な描き方と配色に嘆服するばかりで、描かれた物語の面白さが読み取れませんでした。そのもどかしさ故にますます高まる期待を抱き、山本聡美先生のご講義「絵巻入門―物語を伝える色と形」に臨みました。

山本先生の講義内容は絵巻の基礎知識と絵巻鑑賞の実例という二つに大きく分けられます。基礎知識の紹介、解説の際、先生はいろいろと面白いお話をして下さいました。中でも『源氏物語絵巻』の下書きの線と『信貴山縁起絵巻』の逆勝手の場面が特に印象深かったです。まず『源氏物語絵巻』ですが、絵の具が剥落した部分に下書きの修正された跡が生々しく残されているのです。その跡を見た瞬間、絵巻を命あるもののように感じてなりません。そして逆勝手の場面ですが、右から左へと転換してゆく場面の中に突然左から右へと人物が飛び出した逆勝手の場面に注目すると、平面的で静止した絵が突如として躍動的になります。まるで映画を見ているような感じがして、「描かれた物語」という言葉を実感しました。また絵巻鑑賞の実例の部分においては、『源氏物語絵巻』『信貴山縁起絵巻』『九相図』を取り上げられて、絵巻鑑賞と絵巻研究の基本的な方法を紹介して下さいました。先生のご指摘されたいくつかのメタファーを通じて絵と物語本文や先行文学との巧妙な呼応が垣間見え、絵を読むことが本文を読むことと同じように広汎な知識と鋭い問題意識を必要とすることが分かりました。

午前中の山本先生のご講義が、推敲や隠喩など本文テキストと共通する絵巻の方法を解き明かして下さいたのに対して、午後の佐野みどり先生のご講義「絵巻における時間と空間の表現」は、本文ではあり得ない絵ならではの手法を解説して下さいたと思われまふ。特に佐野先生が『信貴山縁起絵巻』を例として示された、聖なる空間を描く場面と人間世界を描く場面の手法の差異は印象的でした。俯瞰の視点や時間の逆行などの手法は聖なる時空と俗なる時空との対比を表し、異時同図法は流転する人間の時間と悠久の御仏の時間との対比を表している、と先生はご指摘下さいました。それを伺った時、構図や時間表現の工夫を通じて読者に物語の主題を直感させるのは、視覚的なメディアによって初めて達成できる効果だろうと頷かずにはいられませんでした。

気が付くと一日のセミナーがあつという間に終わってしまっていました。先生方のご講義を拝聴し、「描かれた物語」の面白さが幾分わかったような気がするのと同時に、もっともとお聞きしたい気持ちでいっぱいでした。浅学菲才の身で聞き漏らした内容も多いかもしれませんが、新しい知識と分野に触れた興奮で胸が躍っていました。一日という短い間に、絵を描く材料から絵巻の主題まで、様々な次元の絵巻文化を体験できるチャンスに恵まれたことは本当に幸せな事だと思っています。



山本聡美先生の講義



佐野みどり先生の講義

帰途、長沙への飛行機の窓から雲を眺めていると、ふと『信貴山縁起絵巻』の剣護法童子が空を飛んでいる場面が頭に浮かびました。自分も剣護法童子のように聖なる芸術の世界から私達人間の世界へ飛んでいるのではないかと素晴らしいセミナーの余韻にうっとりしました。

(湖南大学講師 邱春泉)

2019 ホノルル国際共同研究会と日本古典籍セミナーの開催

さわやかな風が吹くホノルルにて、二日間にわたって開催された研究会（2月28日）とセミナー（3月1日）の様をご報告します。

まずはハワイ大学マノア校にて行われた国際共同研究会について、プログラム順にそって簡単に紹介します。当館副館長（当時）・小林健二氏「Tanrokubon」は、その用語規定からして困難をとまなう「丹緑本」について、事例に即してその分類と意義を説きました。立正大学准教授・伊藤善隆氏「Recycling woodblocks used for illustrated books of haiku」は、俳書を例に、絵入版本の版木が再利用され、それが新たな営為に結実していることを証し、大和文華館館長・浅野秀剛氏「Illustrated oridehon (accordion-folded copybooks for painting), ebangiri (decorated stationery), and kashibukuro (wrappers for sweets)」は絵入折手本、絵半切、菓子袋といった、これまで見過ごされがちであった錦絵周辺の多色摺木版画を紹介しながら、その魅力を存分に伝えました。なお、この二つの発表は、ここ数年にわたり行われた当館・山下則子教授の科研費「在外絵入り本を中心とする書誌・出版・解釈の総合的研究」によるレインコレクションの調査の成果であることを申し添えておきます。つづく、カリフォルニア大学バークレー校准教授・ジョナサン・ズッカー氏「Block-printed books in the age of the Digital - the case of the digitized version of SarituUdan」は、歴史的典籍NW事業の国際共同研究にて進行中の『蓑笠雨談』の英訳ならびにデジタル版注釈の実践を例として、公開が進む古典籍画像の利活用を目指す、デジタルヒューマニティーズのいまを示すものとして有意義な内容でした。ブリティッシュ・コロンビア大学教授・ジョシュア・モストウ氏「Gender and Late Edo Editions of The One Hundred Poets with Commentaries and Illustrations」は、江戸時代後期の絵入注入『百人一首』の受容のあり方を検証しながら、ジェンダー論に切り込む斬新な切り口、ハワイ大学マノア校教授・ロバート・ヒューイ氏「Using kotenseki for research on Japanese writing in the Ryukyu Kingdom, with a focus on the Sakamaki-Hawley Collection」はマノア校の坂巻・宝玲文庫のうち、宝玲文庫の琉球文献古典籍調査の実相が紹介され、その豊穡な世界を垣間見せてくれました。

なお、同日、ロバート キャンベル館長による講演も催されました。

翌日は、ホノルル美術館において古典籍セミナーが開催されました。2017年・2018年に引き続き行われたものです。現在継続中であるリチャード・レインコレクションの調査をベースとしながら、当館教員による以下のようなプログラムで構成されました。

落合博志「装訂 (how traditional books are put together)」

神作研一「書型 (shapes and sizes of traditional books)」

恋田知子「絵入本-写本 (illustrated manuscripts)」

入口敦志「嵯峨本 (a type of Edo Period mass-printed book)」

木越俊介「絵入本-版本 (Illustrated block-printed books)」

紙幅の関係で各内容は詳述できませんが、いずれも具体的な資料に即しながら、古典籍をひもとく際のツボを分かりやすくレクチャーする好内容でした。こうしたセミナーは回を重ねるごとに、何を知りたいのか、何を伝えるべきかという相互の理解が深まるようで、質疑応答も活発に行われ、双方向の交流の場としてとても有意義なものであったと思います。

古典籍の調査を通して、調査した研究者がその所蔵先の資料の価値をお伝えするのはもちろん、さらに所蔵機関内外の人々に、広く古典籍の魅力を伝えることの大切さをひしひしと感じた二日間でした。本企画に携わった全ての関係者に感謝申し上げますとともに、このような場に参加できたことの幸せを噛みしめ、今後のさらなる交流の深まりを切に願っています。

付記 本事業は主として、総研大のプロジェクト経費、ならびに、科研費「在米日本古典籍（リチャードレインコレクション）の調査研究と教育活用に関する研究」（国際共同研究加速基金【国際共同研究強化（B）】、代表 神作研一）による成果です。

（木越 俊介）



TEXT AND TEXTUALITY IN JAPANESE COURT POETRY

—AAS 2019 デンバー 研究発表—

今春2019年3月21日から24日にかけて、コロラド州デンバーのSheraton Denver Downtown Hotelを会場として開催されたAAS【Association for Asian Studies Annual Conference】に初めて参加し、北米の研究仲間と一緒にパネルを組んで英語による研究発表を行ってきた。

AASは北米最大の国際アジア学会で、例年3月中下旬に開催される。今年も4日間で394ものパネルが組まれて世界中から3000人以上の研究者が参加、発表は文学・歴史・美術などの人文学のほか社会学・法学・経済学など多岐に亘る。中でも中国研究は盛んで、おそらく参加者の半分以上は中国の研究者たちであった。

せっかくのAAS初参加だったものの、公務の都合により2泊4日という強行日程になってしまったため、自分のパネル以外には国文研によるビジネスセッションを聞くに留まったのはいかにも残念なことであった。そのBセッション「Pre-Modern Japanese Books: International Share and Translation of Japanese Codicological Terms」は3月23日(土)に行われ、「新日本古典籍総合データベース」やマレガ・プロジェクトの紹介のほか、佐々木孝浩(慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長)・海野圭介(国文研)両氏によるプレゼンテーション「書誌学用語の国際共有—課題と展望—」があった。テクニカルタームの国際化(主として英語化)は本当に重要かつ喫緊の課題であり、会場の質疑も活発で大きな刺激を受けた。AASにおける国文研のBセッションは、齋藤真麻理国際連携部長の統率のもと2018年3月のワシントン大会から開始されており、今後も継続して行われる予定である。

さて、私の【PANEL239】【TEXT AND TEXTUALITY IN JAPANESE COURT POETRY】は3月22日(金)に開催された。Chairは神作、Discussantは内藤まりこ氏(明治大学)で、発表者とタイトルは以下の通り。

◆ Riley Soles (Univ. of Colorado Boulder) The Dream of the Poem: Shunzei and Waka Textuality

◆ Malgorzata K.Citko (Florida State Univ.)

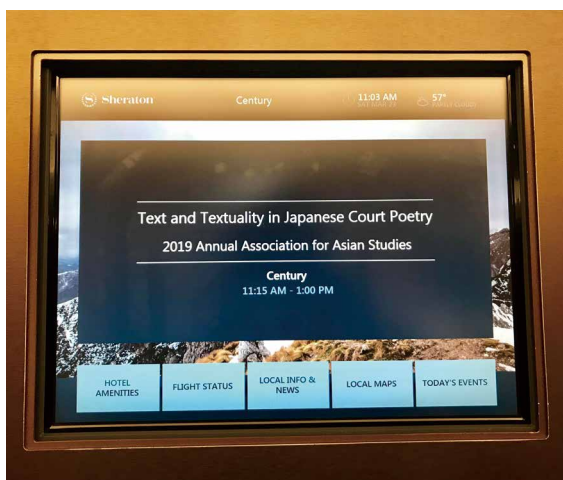
Man'yōshū as a Genre: Approaches to Premodern Japanese Texts

◆ Ken-ichi Kansaku (National Institute of Japanese Literature)

Printed Versions of Poetic Collections: History of Japanese Court Poetry and Literature in the Edo Period

私の発表は歌書刊本の展開と特質に関するもの。日本国内での実証的研究をそのまま喋ったのだが、50名を超える聴衆の反応は極めて敏感で、好感触を得た。ライリー氏とチトコ氏の発表も含めて質疑は活発であり、内藤氏のコメントとともに、フロア全体で和歌文学研究の最前線を確認し得たことは非常に大きな収穫であった。

なお、わたくしどもの研究仲間としては、日本近世文学専攻の中嶋隆氏(早稲田大学)と丸井貴史氏(就実大学)が、それぞれにパネル発表を行った。英語による研究発表というハードルを超えて、今後も皆がこのようなチャレンジを継続させ、日本国内における高い研究レベルを北米やヨーロッパの研究者たちと「共有」していくことが何より重要だと改めて強く認識するとともに、わたくしども日本側としても、海外における研究の動向と現況を謙虚に「学ぶ」必要性を感じている次第である。(神作 研一)



左から内藤氏、ライリー氏、チトコ氏、筆者

国文学研究資料館基幹研究「アーカイブズと地域持続に関する研究」 シンポジウム「松代藩・真田家の歴史とアーカイブズⅢ」

2019年2月23日、長野市役所松代支所において基幹研究「アーカイブズと地域持続に関する研究」シンポジウム「松代藩・真田家の歴史とアーカイブズⅢ」を開催しました。このシンポジウムは基幹研究の調査・研究成果を地域に還元し、地域住民と共有することで、地域の文化資源の保全と活用を進め、地域持続に資することを目的としたものです。

最初に、このシンポジウムを企画立案した西村慎太郎（国文学研究資料館准教授）より趣旨説明があった後、3本の報告を行いました。第1報告は菅原一（一橋大学大学院博士後期課程）「豪農の結婚と縁戚 ―松代藩士のルーツ探しに関連させて―」、第2報告は荒木仁朗（国文学研究資料館機関研究員）「江戸時代の金銀引替と松代地域」、第3報告は福士沙織（茨城大学大学院博士前期課程）・小荒井衛（茨城大学教授）「善光寺地震での城郭・城下町被害と地形 ―松代・飯山の例―」です。また、第2報告と第3報告の間に、西村より当館の「収蔵歴史アーカイブズデータベース」の紹介と松代藩関係文書の検索方法などをレクチャーしました。

それぞれの内容や成果については紙幅の都合上記すことはできませんが、地方史研究協議会による『地方史研究』誌上において、小泉詩織氏が「参加記」として詳細な分析を加えているのでそれに譲りたいと思います。

当日は寒さ厳しく、天候が悪かったにも関わらず、113名もの参加を得、松代藩や真田家への関心の高さがうかがえました。この基幹研究は2018年度が最終年でしたが、地域貢献に結び付けられた点は何よりの成果であると思われます。ここで築き上げた点を踏まえつつも、新たな視角で取り組む基幹研究として「地方協創によるアーカイブズ保全・活用システム構築に関する研究」を2019年度よりスタートさせましたので、こちらにも期待して頂きたいと思えます。

最後に、このシンポジウムの後援を頂いた真田宝物館と準備や運営を進めて頂いた方がたに心より感謝致します。
(西村 慎太郎)



第16回日本古典籍講習会（平成30年度）

国文学研究資料館では、日本の古典籍を所蔵する機関の職員（古典籍取り扱い経験が概ね3年以内の方）を対象に、書誌学の専門知識や整理方法の技術習得を目的とした研修の機会として、毎年1回、国立国会図書館との共催による日本古典籍講習会を開催しています。

第16回目となる平成30年度は、平成31年1月22日（火）から25日（金）までの4日間で開催され、当館では初日から3日目までの研修科目が開かれました。このうち前半2日間は、今回からの試みとして大学院生や若手研究者による聴講を募って行われました。

当館教員による講義では、実物の古典籍に触れる時間を設けながら、装訂、料紙、表紙文様、くずし字、写本の奥書・識語、版本の刊記、近代文献の奥付、蔵書印、江戸の出版文化などの、古典籍の取り扱いに必要な基礎知識が解説されました。続いて当館職員による閲覧室・書庫の見学案内、和古書目録データベースについての説明があり、また研修内容の業務に即した実践として、和古書目録を作成する実習科目が行われました。

受講者からは、「説明だけでなく実物をもって観察しながら頭に入れることが出来た」「実際に自分で現物から目録情報を採る体験をすることで特徴が実感できた」「一定以上の経験・知識がある参加者を条件に、一歩ふみこんだ研修・講義も開催してほしい」など、貴重なご感想・ご意見を多数いただきました。

(岡田 貴憲)



〈新収〉 白田甚五郎旧蔵資料の紹介

白田甚五郎氏(1915-2006)の旧蔵書301点が、ご令息正矢さま(元桜美林大学教授)のご厚意により、このほど国文学研究資料館に収められました。*特別コレクションとして「碧洋白田甚五郎文庫」と命名。

白田先生は国文学者・民俗学者。國學院大學名誉教授。専攻は和歌・物語・日記・歌謡・口承文芸など広範囲に及んでいて、それぞれに多数の著書論文がありますが、主要なものは『白田甚五郎著作集』全8巻(おうふう、1995-97)にまとめられています。国文研とのゆかりも深く、国文研設立の機縁となった「国語・国文学研究資料センター設立推進連絡協議会」(代表 久松潜一)では「事務局」を、1972年から1986年までは国文研の評議員を務められました。

さて、その蔵書は御専攻を反映して実に多岐に亘っており、さまざまな優品が含まれています。

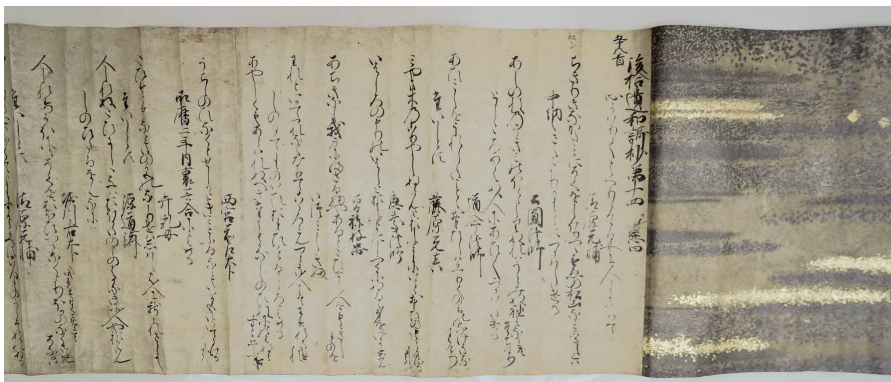
- ◇『後拾遺和歌抄』(〔平安末期～鎌倉初期〕写・1軸)*巻第19。伝寂蓮筆。
- ◇『後拾遺和歌抄』(〔鎌倉中期〕写・1軸)*巻第14。伝藤原為家筆。
- ◇『堤中納言物語』(〔元禄頃〕写・横10帖)*九条家・前田善子旧蔵。
- ◇『子易の本地』(〔江戸前期〕写・2軸)*本号「表紙」ならびに「表紙絵資料紹介」(恋田知子執筆)参照。
- ◇『はまぐり』(〔寛文延宝頃〕写・横2冊)*奈良絵本。
- ◇『隅田川』(〔寛文延宝頃〕写・横1冊)*存巻下。奈良絵本。
- ◇『撰要両曲卷』(応永20年写・大1帖)*沙弥実阿写。中世歌謡である早歌の貴重資料。
- ◇『おどりづくし』(〔明和頃〕刊・中1冊)*鈴木春信風絵入。

以上はほんの一例であり、早期に閲覧利用していただけるよう、これから鋭意、整理とデジタル化を進めます。

なお、今秋開催予定の国文研企画展示「本のかたち 本のこころ」(2019年10月15日～12月14日)において、『子易の本地』ほか数点を展示します。どうぞご期待下さい。

正矢氏をはじめとするご親族の皆さまに、改めて感謝と御礼を申し上げます。

(神作 研一)



『後拾遺和歌抄』(〔鎌倉中期〕写・1軸) *巻第14 伝藤原為家筆

閲覧室だより

閲覧室に関わる動向を2点、紹介します。

【A】 昼休みの出納

2019年度より、昼休み(正午～13時)の出納対応を開始しました。

【B】 蔵書点検期間の繰り上げ(再案内)

昨年度(2018年度)より、それまで年度末(毎年3月最終週)に設けていた蔵書点検期間を見直して、2月下旬(第4週)に繰り上げました。蔵書点検期間を入試繁忙期に移すことで、これまで要望が多く寄せられていた年度末の開室を実現させたものです。本件については、本誌51号(2018年5月刊)の「閲覧室だより」で紹介済みですが、たくさんの皆さまにご利用いただきたく、再度ご紹介する次第です。

(神作 研一)

総合研究大学院大学日本文学研究専攻の近況

○平成30年度特別講義（小林健二教授 最終講義）を開催

平成31年3月26日（火）に、平成30年度特別講義を開催しました。平成30年度で定年退職する小林教授の最終講義でもあり、館内・館外から68名の参加者がありました。受講者の方々は熱心に聞き入っている様子で、活発な質疑もみられ、盛況のうちに終わりました。

＜講義内容＞

小林健二教授「語り物の絵画化」



小林健二教授

○平成30年度学位授与（平成31年3月授与分）

平成30年度の学位（博士号）が以下のとおり授与されました。

金子 馨（論文博士）「藤原教長の口伝『才葉抄』の研究」

塩崎俊彦（論文博士）「俳文芸史攷」

○平成30年度学位記授与式について

平成31年3月22日（金）に、総研大 葉山キャンパスにて平成30年度春期学位記授与式が開催されました。当専攻からは、金子 馨さん（論文博士）、塩崎俊彦さん（論文博士）（計2名）が出席し、長谷川真理子学長から学位記を授与されました。

○平成31年度新入生紹介

平成31年4月9日に、総研大の葉山キャンパスにて入学式が執り行われ、当専攻に新入生2名（児島啓祐さん、高須賀萌さん）が入学しました。

○2019年入試説明会

令和元年10月25日（金）13時30分から、2020年4月入学希望者を対象とした入試説明会を開催します。詳細は、当館 Web サイト「入試説明会」ページにてご確認ください。

<https://www.nijl.ac.jp/activity/education/soken/seminar.html>

＜開催概要＞

日 時：令和元年10月25日（金）

13:30～17:00

開 場：国文学研究資料館

内 容：特別講義（予定）、専攻や入試についての説明、施設見学、教員との相談会など



左から山下研究科長、塩崎さん、金子さん、落合専攻長



左から落合専攻長、高須賀さん、児島さん

● 2019年度イベントカレンダー（予定）

日付	イベント
1月15日（火）～9月14日（土）	通常展示「和書のさまざま」
7月22日（月）～8月9日（金）	アーカイブズカレッジ（長期）
8月26日（月）～9月13日（金）	
10月15日（火）～12月14日（土）	企画展示「本のかたち 本のこころ」
10月25日（金）	総合研究大学院大学日本文学研究専攻入試説明会
11月2日（土）	古典の日講演会
11月4日（月・振休）～9日（土）	アーカイブズカレッジ（短期） 於：熊本市
11月15日（金）	日本語の歴史的典籍国際研究集会
11月16日（土）～17日（日）	第43回 国際日本文学研究集会
11月22日（金）～28日（木）	総合研究大学院大学文化科学研究科出願受付期間
2020年1月14日（火）～	通常展示「書物で見る日本古典文学史」

大学支援「国文研でゼミを」 大学教員の皆様へ

国文学研究資料館のゼミ室で、豊富な所蔵資料を利用しながらゼミや講義を行うことができます。
 ※学部・大学院で行っている日本文学や日本史の授業が対象となります。
 ◆詳細は当館 WEB ページをご覧ください。
https://www.nijl.ac.jp/activity/education/semi/post_43.html

表紙絵資料紹介

『^{こやす}子易の本地』〔江戸前期〕写。2軸。上巻・天地33.3×全長1191.5cm、下巻・天地33.3×全長1224.6cm。

本書は、二面八足の異様な形姿で誕生した男女双体児が苦難の末に清水寺末寺の泰産寺子安塔の地藏となるまでを描いたお伽草子（室町物語）。二面八足の異常児が危難を脱し、子安の神（地藏）となる基本構造を持つ『子やす物語』は、その内容から二つの系統に大別される。一つは、『百練抄』永万元年（1165）前後に記載された二面八足の異常児の誕生と都での怪異現象をめぐる記事に基づく物語で、ニューヨーク公共図書館のスパンサー・コレクション蔵の奈良絵本3帖やハーバード大学フォッグ美術館蔵の卷子2軸などが知られている。もう一つは、異常児の苦難と幸福という基本構造を同じくしつつも、時代設定や人物名など細部は異なり、最終的に丹波大江坂の子安地藏堂の由来を説く。慶應義塾大学附属斯道文庫蔵の寛文元年（1661）刊の絵入り版本、および白百合女子大学図書館蔵の卷子2軸が知られる。本書は後者の系統の物語で、用字など細かな異同はあるものの、白百合女子大学蔵絵巻と同系統のものである。

本書は鳥の子紙に金泥で草花等の下絵を施した豪華な絵巻で、上巻6図、下巻7図の合計13図を付す点も白百合女子大学蔵絵巻と共通する。ただし、両者の絵師は異なり、絵の構図などにも相違が認められる。詞書は寛文・延宝頃の絵巻の筆耕として知られる朝倉重賢（あさくらじゅうけん）の筆で、本絵巻を収める木箱の蓋にも同筆の書名が付されており、貴重である。表紙に掲出したのは、災いの真因である二面八足の鬼を退治する場面。2018年度新たに収蔵された白田甚五郎氏旧蔵資料の一点。

（恋田 知子）



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国文学研究資料館
 〒190-0014 東京都立川市緑町 10-3
 Tel:050-5533-2910 Fax:042-526-8604

国文研ニュースNo.55
 発行日 令和元（2019）年6月24日
 編集 国文学研究資料館 企画広報室
 製作 株式会社 アズディップ
 ©人間文化研究機構国文学研究資料館